

南瓜

蛇鳴いて南瓜の花
落ちるる丸裸
南瓜かゝるて戻り

麻

川麻やどの小娘の
戀衣麻刈りて
屏風に淋し山の影
日の入りや麻刈り
あとの通り雨

麥

行刈の槍 五六本
麥の秋麥川つて
瘦の七やの小村かな
麥藁や地藏の膝
子ちらしかけ

元山のとかくとーて
麥の秋

須磨

入口に麥干す家や
古簾

夏雜

須磨の閑所の跡といへば

瓜茄子どこを閑屋の名
残とも

秋

立秋

秋立つとさやかに人の目さあけり

秋来ぬと柱の拂子動きけり

白雲も秋立つてまだ地は暑し

箱庭の橋を落ちるみのけさの秋

客舎

秋立つやとちらるを見ても人の國

須磨

秋立てば淋し立たねむあつとらし

秋立つと何ぞ在の早合點

須磨保養院のあり頃遠人はいりた

りとて駕りまわぐたにわはる物もれり

やがて明け行く程に次の日立秋なり

くれむ二句

けさの秋まきのふの物と取られけり

のーりー人静まりてけさの秋

秋立つやほらりと止立ちし蟬の壳

初秋の枕小さき宿屋のりり

初秋の日脚をいこむ朝寢のな

初秋

初秋の望塵に動く日あーか

残暑

裏窓より夕日さーこむ残暑か

草山より残の暑さやまだらほけ

砂濱に残の暑さをほのめりす

廣嶋にて飄亭よりとと

戯別に汗衫をゆるふ残暑か

しあか

冷かき雲の北月中の入り日かな

冷かき麻覚下山の雲深き

古白の舊庵よりたゞの虚子に

寄す

尻の跡のもう冷かみ 古墨

身入 學ぶ夜の更けて身み入む昔火

まさよし

鉄輪

まさよしや 燭をる風の中

朝寒 朝寒の雀啼くなり 忍竹

朝寒や蘇鉄見に行く妙國寺

朝寒のはらりくと根竹世かな

朝寒や起つて廊下を徘徊す

朝寒を日に照らすと首途は

朝寒の旭を待つ人や舟のへり

北敷陰に石切の音の朝寒

朝寒や今日の天氣を啼く雀

朝寒の風が吹くなり雪の不二

觀山公翁の墓を訪て

朝寒やいとより墓前にぶらぶら

正宗寺一宿を訪ふ

朝寒やたのもと響く内玄関

須磨

昇る日や朝寒の松の雀鳴く

夜寒

白波のきはみ火を焚く夜寒は
妙法の太鼓聞こゆる夜寒は
佛壇のともし火消ゆる夜寒は
丁々と碁を打つ家の夜寒は
鼠狩れむ鼠の突ふ夜寒かな

菽村に旅籠屋もなき夜寒は
首途の用意して寝る夜寒は
次の間の灯も消えて夜寒は
蜘蛛殺すあとの淋しき夜寒は
門附の下町通る夜寒かな
辻駕籠に盗人載せる夜寒は
灯をともしす家奥深き夜寒は
さし向ふ夫婦の膳の夜寒は
いさり火を横に見て行く夜寒は
旅籠屋の居風名ぬき夜寒は

不忍の池をめぐりて 夜寒かた
傾城子袖引かれたる 夜寒か
出女の油をこぼす 夜寒か
片里に盗人たゆむ 夜寒か
船子寐て岡の灯乃滅る 夜寒か
釣橋より提灯りたる 夜寒か
大寺より一人宿かる 夜寒か
鼠追一む三匹逃けり 夜寒か
おもてかり見ゆや 夜寒の最合風呂
木曾川に向くや 夜寒の門構へ

通夜堂よりまだき 夜寒を覚えける
夜寒さや人静まりて 海の音
夜寒さや家なき原に 灯のともる

陰房鬼火青

人住おぬ戸の灯のうつる 夜寒か

船中

知らぬ女と背中合せの 夜寒か

運坐

黙りけり 夜寒の男 五六人
三津にて諸友を別る時 戯れ

狸伴子也

獺と狸の送る 夜寒くは

須磨 三句

灯ともさぬ村家つゞきの夜寒く
蕎麦はあはれと夜寒の温鈍きこゝの世
須磨寺の門を過ぎ行く夜寒く

奈良角定に

大佛の足もとに宿る 夜寒く

即景

灯更けて書読む窓の夜寒く

肌寒

肌寒や多引き習ふ小敷原
浜橋の寒勝りなりて肌寒く

布袋の眠りたる画に

風引くな肌寒頃の臍の穴
砂川や浅瀬に魚の肌寒く
や寒み机子 向ふ背くくあり

霜月来り

や寒み襟を正して坐りけり

漸寒

坐寒

うら寒や綿入着たる小大名

夜長

明けぐれみ立ていそげバ夜が長き
長き夜を何に更かすぞ岡の家
蠟燭の燃えきれんごと夜が長
長き夜の硯まうつるとも一水
長き夜の連歌に更けて朝寐か
長き夜の雞や太鼓や喇叭か
長き夜の面白きかな水滸傳
寐らぬめよ長き夜頃の物の本

長き夜や人灯を取つて庭を行く
長き夜や提灯わたる大井河
長き夜や夢み拾い一貫文
神戸出て夜の長さよ紀州灘
大村の静おり返る夜長丸
下女郎屋の話聞ゆる夜長火
長き夜や木の間に細き常夜燈
長き夜や初夜の鐘撞く東大寺
長き夜や古傾城の十くめ言
夜の長さ船で測れむ八十里

長き夜の夢の浮橋絶えてなり

有感

長き夜を月取の猿の思案ふ

花かいたの画

長き夜の月の雨のと更けて行く

寓居酒家より

長き夜や隣樓の三弦引きかみぬ

大鼓やみ鼓やみ三味の夜を長き

待戀

是二首の隣へはいる夜長かた

秋の夕

契りたを待つや夜長の空たのめ

謡曲正尊

長き夜の物音聞くや白拍子

鎌倉や秋の夕日の花法師

誰耳たより秋の夕の渡り守

秋の日の一人に暮る野道水

水流れ雲行く秋の夕かた

馬鳴いて秋の日暮る別れ

有感

秋の日の傾きをわれ家なり

三津濱

海晴水て小富士も秋の日にたたり

秋の暮

本陣や下手な掛畫も秋の暮
尾の道の便船も秋の暮
牛行くや毘沙門院の秋の暮
此頃は辻君見えぬ秋の暮
諱と盲目と啞と秋の暮
淋しさや氣車猶急ぐ秋の暮

驢み来りて山陰急ぐ秋の暮
菽寺に磬打つ音も秋の暮
誰人を睨んで通る秋の暮
大佛をまたはまが淋し秋の暮
老僧に棒加へけり秋の暮
山本の一むら杉や秋の暮
棺通る四條の橋や秋の暮
秋の暮狸をつれて歸りけり
秋の暮われよと許り鐘を撞く
秋の暮大船をかりり

秋の暮春の暮の松摩 我と見

須磨

のづらーや海に帆の無い秋の暮

題画

琵琶やめて何が聞こゆ。秋の暮

諸友に三津迄送らなせ

酒あり飯あり十有一人秋の暮

田別

十一人一人となりて秋の暮

再び須磨より

ちかづきの仲居も居らぶ秋の暮

歸京途中

蓮の死んだ山あり秋の暮

田別

いさよーく別れてのちの秋の暮

六雅の園

八月 八月を凡に淡路の船がり

高濱

八月に樓下み満了 秋の暮

二百十日

大佛に二百十日もたのりつかり
内海や二百十日の釣小舟

龍田姫 龍田姫四十載えぬと申しけり

暮秋

行く秋の鳥も飛んでいさひたり
行く秋の涙もたまりありれり
秋行くと砂糖木島の荒れまかり
行く秋や店も元枯たる春日盆
行く秋や奈良の小寺の鐘を撞く

行く秋や奈良の小店の古佛
行く秋の月夜を雨にこぼし
行く秋の野菊白くも咲きけり
行く秋や庵の夕を鴉鳴く
行く秋の眼を塞きたる一人哉
行く秋を糸瓜みすはる雲もけり
行く秋の檣杭ばかり残りけり
行く秋の敵国近し剣の霜
市中やけりあつた秋の行く夕
月もあり黄菊白菊暮る秋

世の中の秋か行くをよ都人
寺々に秋行く奈良の月夜かな
枯紅葉青紅葉秋の行く小庭
蜘蛛の巣の獲物も無し秋暮る
笠帯木の笠帯にしなす秋をぬ
賣ル残る木魚一つは秋の行く

芭蕉の傍に題す

此君にわさよ秋行く四畳半

余戸手引松

行く秋や手を引きあひし松二本

感あり

行く秋の我は神無し佛無し

松山を立ち出づる時

行く秋のまた旅人と呼はれり

空余子臥し

行く秋の腰骨りむ旅宿は

須磨より奈良よ臥せり

須磨に更けて奈良よ行く秋あはれ

三月堂

行く秋や一千年の佛たち

法華寺

尼寺や寂莫と——て秋の行く

法隆寺
二句

行く秋を——づればけり法隆寺
行く秋を雨の氣直待つ野奈屋

歸菴
三句

行く秋を生きを歸り——都
行く秋の死ふまこといかに歸りけり
行く秋や菴の菊見の五六日

九月尽 易を點——先の卦に到り九月盡

冬近 我庵は蚊帳の別れて冬近——

羽笠布五徳など画きたる也

冬待つや寂然と——て四疊半

秋時候 秋牙えたり 我れ鯉切らん水の色

秋澄みたり魚中み浮いて底の影

秋の城山は赤松をのりのかな

秋晴ぬ空の限りの蒸氣船

秋晴れて西國橋の高さの如
奈良の秋の唐招提寺西大寺
汽船過ぎる波よる秋の小島か
杉木立淋しき秋の島居小
鈍くまうて猶憎き秋の毛虫小
花細し秋まろろふ野撫子
夕禁か漁村の秋の静かたり
雪やぶる秋の山寺灯とらり
奈良淋し萬葉の秋を見付けたり
古里や秋ま瘦せたよ小傾城

三條小橋柳秋なり人稀なり
くわらくと何よ火を焚く秋の村
旅人の盗人よ逢ひぬ須磨の秋
淋しきや盗人をゆる須磨の秋
一輪の天竺牡丹活けて秋
人もなかり杉谷町の藪乃秋
湖の細りて瀬田の秋
病起杖よ倚れむ千山万嶽の秋
青くとも猶淋しきよ須磨の秋
来て見れば凡が吹くあり須磨の秋

人去つてすがく——さよ須磨の秋
旅人や寒かりま来る奈良の秋
西東 山みかりよる奈良の秋
禅寺や十ほえん青き庭の秋
槍持やいとりたくら橋の秋
山を去てそらに悲——里の秋
山遠く湖けりかあり三井の秋
百日紅梢がかりの寒さあり
須磨に在る頃都の人かり菓子
をわたりこ——

うら——き菓子贈らむ——須磨の秋

燈火漸可親

猿蓑の秋の季あけて読む夜は

豊太閤書簡のうら——

七月十三日らん々と書きし今秋
一宿来。

のら——や僧来て秋の運坐火

和山よて京に上る人と送。

故郷の淋——き秋を忘るな

和山城

秋高—首葉い沈む城の上

松山郊外

秋晴水々見隠れぬ—ま山あり

千秋寺二句

山本や寺ハ黄檗 杉リ秋
画をかきし僧今あらお寺の秋

自著俳話の後ニ題す

及水鐘や敲けども秋の聲をらす

松山南郊薬師

寺清水西山も見えぬ秋老いぬ

嗽石ニ別

行く秋よとよよの汝よ秋ニつ

碌堂ニ別

秋三月馬鹿を尽して別れろ

碌堂ニ戯

碌堂といひけり 秋の男かな

花火

人かへる花火のあとの暗さ
城山の北よとくわらく花火かな
身飛んで日の落ぎはの花火
道見えて周上り行く花火
音もなま——松の梢の遠花火
雨雲に入りとは開く花火
晝見れむ小旗立てたり花火
夕花火虹の浮橋砕きけり

扇置 置扇拾ふて笛子 物狂い

扇捨てて手を置く膝のもののさよ
傾城の画

忘れたる扇返さん君がもと

捨團扇 白頭の吟を書きけり捨團扇

捨てらるゝ厠に古りし團扇
捨團扇遊女の顔のあはれり
捨團扇肴の丹月にまよひり

七夕 七夕を参らぬ御代も 戀男

七夕や木よをよまのの涙 雨
●船に寝て星の別を見夜が
行水ちやふんどー代貸さん男七夕
七夕はや鳥の聲よて明けみり
梶の葉に書きたなやみたの女八
七夕や蛙の振舞やんーあき
七夕にソ早復を代貸さや小傾城
雲のさや星別よと覚ええり
牛載せて喜迎舟漕ぎ出ーぬ
舟橋に七夕竹のわりけり

橋もなー 鵲を飛んでーまいり

魂奈

おろろかよなりおさの世の魂奈
孟蘭盆や無縁の墓よ鳴く蛙
聖霊の寫真に憑よや二三日
魂奈の門を覗くや物狂い
菰宜殿や門を出づるバ盆の月
満州討死の墓を画きたは
孟蘭盆の鵲鳴こや 墓印
病中

病んで父を思ふにや魂祭

戦後 二句

魂棚やいとさを詠ふ人二人
討死の位牌新らー山の馬

草市

賣れ残りのもの露けーや草の市
草市や人をばかりも宵の雨

燈籠

垣にに見ゆ隣の燈籠と
燈籠とともしこ留守の小家火

賤が燈端干魚燈籠蕃椒
人呼ぶや燈籠並べし道の端
たりれ男の遊具祭の燈籠小
孝行のしたい頃には燈籠小
灯をともすせなよめく切籠

妖怪体

たをやめの是もと暗き燈籠小

高燈籠山の端や晝見の寺の高燈籠

日の入や星のあたりの高燈籠

火が消えし雲わがりし高燈籠

走馬燈 同ト事と廻燈籠のおけり

麻焚 迎火や父の似たるの類の明り
いふたよへ迎火焚こよるらんせん
送火の心えたちかぬ月夜に
燃えぬて麻木の烟西へ吹く

生身魂生身魂七十と申し送者

墓恭 家族従者十人許り墓恭

棚經 棚經や小僧面白さうに讀む

施餓鬼 残の蚊の瘦せてあはれや施餓鬼棚
淋し十の施餓鬼のあはれ火の光
施餓鬼舟を詠王と信ぶし

大文字火 大文字に片類おぼゆき往來

盆過 盆過のい草一生えたる墓場が

角力 わづらふと聞けはあはれや角力正

筆筆焚いて今宵も角力取りけりよ
年若く前歯折りたる角力正

踊 歌垣の世は変りたる踊かな

なまよとさき漁村の月の踊か
くま人の袂觸れたたの踊りか

かぶ入 かぶ入もせぬ迄老いぬ秋の風

站 玉川や夜毎の月に砧打つ

砧うづ五條あたりの伏家バ
人逢し砧打たうよ更かきうま
舟子寐よ大津の砧三井の鐘

長安一片月萬戸擣衣聲

夕月や砧聞ゆる城の内

秋聲

市中や砦打ち絶えて何の聲
よめ入りて餘所の砦を打ちぬくま
業山子こーらへて業山子負い行く山路ハ
人に似て月夜の業山子ありんまり
男をかり●と見えそ業山子の哀れし
くら見ても業山子に耳いなりかりり
笠ぬけて手拭かぶる業山子が
兼平の塚を業山子の矢先かな
草摺のちまきして高き業山子が
人立つて鳥追舟の業山子が

鳴子

わいて誰鳴子に鈴の音すなり
親が子が妻が代りて鳴子が
あはよく鳴子と鳥の飛ぶことよ
餘り淋し鳥を飛せ鳴子引
五六間に鳴子尽また山田ハ
田ハ刈りぬ鳴子の縄のすぢい
鳴るそな風よかす鳴子が

新酒

二三匹馬撃おたの新酒ハ

狐啼いて新酒の酔のさあみり
竹の風新酒の酔を吹きまくり
思ふこと新酒の酔をこころいさ
君今来ん新酒の酔のわさ上

濁酒 濁り酒木蘭いくさより帰る

後彼岸 枯梗折つて露のつれ立つ彼岸

木棉取 木棉取高雄の紅葉まだ早し

葎干 葎干す壁に西日のよありり

毛見 駒とあそ何事向を毛見の人

落水 日焼田やニ反ハからき落水水

新田や汐みさしあふ落水水
おのころや田毎の月の落水水

崩葉 崩れ葉杭一本 残りけり

鷺引 夕焼や鷺の細に人ばかり
細あけて鷺ららばも濱邊より

鳩吹 藪陰や鳩吹く人のあらはる

鹿笛 猿の啼かて鹿笛の夜を淋し

つと人 つと人らぞうき人の門を過ぎたり

叔摺 詩經よ叔摺歌を入れたる

露

白露に濡く不動の火燭かな
曉の骨に露置く焼場は
蓬生や我類たゞ露の玉
柴門孤より誰か住み捨てし露の庵
旅籠屋の戸口で洗ゆむ笠の露
草の戸内ぬれず深き苔乃露

白露や葎の誰の捨車
白露や芋の畠の天の川
朝露の槍の柄つた小関屋を
白露や冷えつゝしたる捨車
火ららく誰人寐たる露の中
竹藪の露の濡れたる夜明け
露掛けや朝日の日暮の川原
朝露や飯焚く煙草を這ふ
けさの露ゆふべの雨や屋根の草
白露や山分け入ル草の露

山陰の橋朽ちんとす 晝の露

玉師非樂戦之子慎佳兵

已むとくむ見事よをらへ劍の露

法隆寺

佛舍利とこたへて消えよ露の玉

蓮華師寺佛足石

千年の露も消えくゞり星の跡

春日社

灯とすすや露のーたる石燈籠
露や置く神の灯まりくゞりは

稲妻

稲妻や、片帆も落す 海の上
稲妻や折れ見せし雲の峰
稲妻よ紅粉つけて居る遊女
稲妻や少しへたさ、二とこら
稲妻の砕けて青い藪の奥
稲妻に松明暗き野道かな
稲妻や横幅廣く折れて出
稲妻よよわやと投げ、礎かな
稲妻や三井から見れば勢田の上

名月

漫々たる海のをこよりくわの月
其月ハ雨がうらーと名のこよひ
精進のこよひに落ちて月の空
名月の山をさしおき山をさし

名月や箆貫子に並ぶ傳の景
新立や橋の下より今日の月
無雜作に名月出たる白田かな
歸ささや此名月に鳥啼く
名月や雞鳴いて静かき
名月や夜明の鐘をうつ時は
名月や半分出たる屋根の上
名月や雲一ちまれば二ちまれば
名月や山よのほれハ山の雲
名月や千石船の人だかり

空み満つる雨路の中より川の月
舟に橋より物干に皆月見は
月見は流さるる身の舟の中
物干に大阪人の月見は
方丈や月見の客の五六人
元山よものしはらぬ月見は
夏のとと畔道ありく月見は
侍の朱鞆もあたつ月見は
正宗寺まこと

名月や寺の二階の瓦頭口
月見は

月芒拂子線香 禪坊主

松山を立ち出づると

見い出の月見もさきえん分れり

達摩賛

兎角一乙九年の月見友もなし

待宵 待宵や十日の雨は晴れも多し

待宵を見たりあしたはなもかき

西夜 日と月の睨みあいり 西 東

十六夜 十六夜や又酒のみ乃言い草に

月二夜三夜さのみもや日曇りり

月円一各は十六夜とかはりり

十六夜や月におとす 迎い船

十七夜 辻君の辻に立待月夜かな

二日月 あら波や二日の月を捲いてき

武藏野や鳥啼いて二日月細

子まおつけてすぐみ失いたる人

つらさ

月たすらむ二日の月とあきふらめよ

三日月 山寺や足下雲暗れ三日の月

後月 我園に日蓮ありて 名の月

流車中一ふこ

名の月 是柄山●で明けみづる

月 月暗——一筋白き海の上

月出で、波静まりぬ伊豆の海
月やなほ——円通堂の歌の會
月真丸船のへさまに上りしり
橋の月誰人柱 泣く夜かな
夕月や松影と落つる坐禅堂
夕月や上に城ある厓の下
有明の落ちて周防の山遠し
ささくくと月昇りしり海の上
下駄の音外え月夜と覚えたたり
廿日過の月ハ出でたり松の北

更科や月に落ち念ふ僧三人
山丸く大きな月の世でみけり
山既し月を吐くべきけしきか
小式部が月今出てゑと啟しけり
をつきりと月現れぬ寺の上
家孤なり月之落ちかゝる草の上
観念の月暗水にけり我一人
笛の音に月之落ちかゝる紫の
空城や人なき月之沙の音
沙と沙漠のをて月一つ

めづらしや蛇のを見たし月の不二
鯉をねて池の面暗き月夜は
須磨の海の西に流れて月夜は
家四五軒石狩の野の月もなし
あしが中に詩人瘦せたり月の宴
溝川の泥鰯泡ふく月夜は
武藏野や大きと出たし晝の月
夕栄やたまたまつて出たし峰の月

須磨夜景

月昇し紀伊と和泉の堺より

須磨にて

読みさして月が出るなり須磨の巻
藍色の海の上なり須磨の月
河辺道途

才むや月見て居れむ水の音
東坡赤壁圖

月の間へ東坡いづく子がまじしと
蕉門十哲の圖子

月の座や人さおくの影法師
奈良 三句

月上の犬佛 殿の足場かち
礎を尋ねてよよの月夜は
旅

菅原草の家も宿借の月夜は
中野道途を吊ふ

鶴鳴いて月の都を思ふ
冬臨出世界

月高——登りつめたる山の上

秋風 絶壁の草——動きけり秋の風

晝の灯や本堂暗く秋の風
馬下りて川の名問へむ秋の風
棧や下をのむけむ秋の風
浅草や猿飼ふ店の秋の風
黒崎や汐早うて秋の風
山陰や寺吹き暮る秋の風
ほ一店の鬼灯吹くや秋の風
元山を越えて吹きけり秋の風
菽菽寺の釣鐘をか秋の風
せまり吹くや音頭が瀬戸の秋の風

船ゆれし音頭が瀬戸の秋の風
とゆ一火を見れむ吹きけり秋の風
船よす築嶋寺や秋の風
晴れきつて秋風荒る朝日小
中空の秋の風吹く峠かな
瀬戸二町中を秋風吹いて表の
秋風や侍町は堀をかり
秋風や雲吹き起る山のかい
秋風や白雲迷ふ親不知
秋風や馬嘶いて幕の音

出征

秋風や馬合點して北の方

征夫を憶ふ

秋風のをなたと許り思へとよ

奈良九句

秋風や團ひもなりに興福寺

秋風や吾は奈良の病人なり

陵をめぐりて吹きぬ秋の風

秋風や奈良の佛も札がつく

右京左京中は畑なり秋の風

般若寺の釣鐘細く秋の風

奈良阪や石切る家の秋の風

古里や小寺もあつて秋の風

秋風や皆千年の物をかり

東大寺三句

大佛の尻より吹きぬ秋の風

大佛の大きき知れぬ秋の風

秋風も吹かれたわが仁王

須磨寺

秋風や平家吊お経の聲

須磨よこ

名所に秋風吹きぬ歌よおん
飄亭六軍に従ひて遠東の
野に戦ふこと一年命を砲煙
弾丸の間に~~絶え~~て帰る
われをよこ神戸須磨よ病
みて絶えんとす玉の諸危
くもこうに緊きとめついで飄
亭よ逢ふことを得たり相見
て惘然言ひさぶるま言葉もあは

秋風や生きたあひ見の汝と我

を貝家の園よ

泣く母も笑ふ其子も秋の風

をよめて古白の墓を訪ふ

我死なで君生きたるを秋の風

吊つむわらふ吹きぬり秋の風

道後公園

水草の花まだ白——秋の風

石手寺の御園の二十四凶病事

は長引し命よけりしと

あり

身の上や御園を引けむ秋の風

石手寺

秋風や何堂彼堂彌勒堂

常樂寺

狸死ふ狐留守なり秋の風

病中

三十の阪見あぐれむ秋乃風

松山南部

秋風や焼場の跡の卯塔場

道後寶殿寺

色里や十歩をなれど秋の風

能樂満仲

とよかくよ一人は失せぬ秋の風

留別

送られそ一人行くあり秋の風

故郷の葺鮪といたしといじ

人のありとふか

秋風や高井のていれむ三津の潮

廣海へわたりて

来て見れぬらうにも吹くや秋の風

再び須磨を来りて

人も居らばほころも立たず秋の風

初嵐 櫓の足場崩れ

初嵐 小不二ゆかんで見ゆ

初嵐 五重の塔よりけり

初嵐 軍艦悠遊と来て

野分 夕ぐしと月さし上る野分

比良こらえ湖水に落ち野分

栗の穂のくたひれも野分

電信の柱を倒す野分

無住寺に荒れたまの野分

釣鐘のそはま寄らぬ野分

豆腐買ふて裏道決る野分

侍乃足駄少人はる野分

吹き返す不二の裾野の野分

方十町砂糖木島の野分

山鳥の尾を吹く居る野分

天の川

峠より真下子に下りて野分
大粒な日生吹き飛ぶ野分
帆柱の山もたより野分
旅人の吹きまよふ野分
大佛の鼻の穴から野分
雲らまね雲飛び野分
野分して野の低くなると
野分荒れて野分
楫を絶えて舟を見る夜の天の川
七夕の足たると見えよ天乃川

霧

峠より平らに落ちぬ天の川
竹藪や着子に落つ天の川
絶頂や銀河さへる剣山
天の川海の南へ流れけり
天の川濱名の橋の十文字
晴れたとて此大水の天の川

島消えそ舟あらはる霧の中
中天よ並ぶ岩あり雨霧の奥
清水の屋根あらはる霧の中

村も見えお竹藪青一霧の中
消えぬ朝月濡る霧の中
山里や米つく音の雨霧北中
心細一我船遅き灘の霧
屋の棟や草すのからよる朝の霧
先陣は雨霧中陣後陣一
山陰や霧よ濡れたる村一つ
山本や日のさす霧を出る鴉
山こや霧吹きおらす奈良の町
山裡に朝霧かゝる峠の北

かけ橋や雨霧の底行く水の音
朝霧かやもろこ一船の何さわら
霧間よりあらねいたるの兵船や
霧晴れよ雲飛ぶ山の四みは
海濱眺望三句

秋
旅鳥一羽に秋の入日のな
秋の日の高石懸る落ちるなり

大根の二葉に秋の日さし
山に倚れむ秋の日落つるあら野

奈良

石手寺

秋の日比木の間に落ちて塔高し
護摩堂にさしこむ秋の日あり

秋の空
晝中の月宙にあり秋の空

見あぐれを塔の高さよ秋の空
清水や舞其の上の秋の空
湖の上よ置きけり秋の空

東雲神社

社壇百級秋の空へと上り人

秋雲
秋の雲湖水の底を渡り

岩山の木もなし秋の雲もなし
秋の雲地獄の底へ吹き落す

秋雨
秋の雨相をいたるく小山

星月夜
近江路や瀬田迄来て星月夜

戸口迄送つて出れぬ星月夜

大佛か真黒なるは 星月夜
三井寺や湖水の上の 星月夜
ちほく〜と黒き村が 星月夜
星月夜 原の一本杉 高し

秋海

門を出て十歩も 秋の海廣し
那古寺の椽の下より 秋の海
秋の海鳥飛ぶ方に いろがたり
秋の海音頭が瀬戸を 流るる
大船の秋の海面 ゆさぶりぬ
秋の海舟一艘も なるる

秋の夕日暮るゝや 空のなごり 秋の夕

初夕 初夕や 海ゆりこし 草の上

初汐や河豚遊び居る亭頭の内
初汐の上ふ灯をす小島かな
初汐も松四五本の小島かな
初汐や千石積の船をらり
初汐やのらくも橋をくぐる船

花野

のほりつめー山平らかな花野
たれーろわ小道尽きたる花野原

野の錦 野の錦 晝の葦礼通りけり

川田

三四日見ぬ間に廣き川田は
いらぐと日の出落ちかゝる川田は
夕陽や川田よ長き鶴の影

秋山

山門を出て下りけり 秋の山
野徑曲り十歩の中に秋の山
七重八重かさきあひぬ秋の山
道尽きて雲起りけり 秋の山
雲迷ふ笠原の下乃 秋の山

秋水

竹の窟南に秋の山近
四方秋の山をめぐらす城下
秋の山御幸寺と申し天狗住む
秋の山五重の塔子並いけり
秋の山杉桂樹とて常信寺
秋の山中石鉄山高
秋の山突元とて寺一つ
秋の山仙人橋の高さうね
此頃や泥割居らば秋の水

山陰や日ありわさし秋の水
静のやに磔打ちけり秋の水
打ちこみし磔沈むや秋の水
石塔の沈めるも見えそ秋の水
鳴かぬ鳥の飛んで過きし秋の水
底見えそ魚見えそ秋の水
秋の水泥一づまつて魚もな

御幸寺山の麓をこ

秋の水澄みの天狗の影もな

秋の川 夢多短く秋の小川の溢れたり

鹿

秋の上又寐ららびらつち鹿の腹
有明や寐けし一らむ鹿の顔
晝の鹿来よや人なき博奕宿
春日野の女鹿呼ぶ夕かな
鹿鳴くや杉の梢の二十日月
わりをーや妻追ひよす晝の鹿
煎餅をくちて鳴ききり神の鹿
月雲子隠れ悲し鹿の聲
岩橋や月にらむく鹿二つ
岩鼻や真向に細き鹿の尻

奈良 五句

鹿鳴くわ小窓の外は薄月夜
鹿聞いて淋しき奈良の宿屋か
奈良の宿悲しく鹿の鳴く夜は
とも火や鹿鳴くあまの神の杜
鹿も居らぬ樵夫下り来る手向山
燕の歸ると見北を戻しけり
燕の帰りと淋しき藏のあひ

燕歸

渡鳥 むさ末らわ小島 小島 雁の雁

とつとつとつ日本の山へ渡り鳥
旅僧やいとつとつ四国へ渡り鳥
晝凄し沖の嵐の渡り鳥
●小嶋のら陸へ五町の渡り鳥
旅人の馬こはがらわ渡り鳥

雁

雨の雁いとつとつ屏風の月を見よ
雁もあー入江見おろす山の上
月の雁をりくさわぐ田面か
雁の聲蓮尽く破れたる

雁の聲 旅の音かぬぞと去る
雁鳴みの夜もかゝる船の旅十日
飯櫃子雁の落ち来り堅田
旅枕雁が鳴いても目があめ
行水の首筋わたる雁の聲
投げ出したやうに山から雁の
長橋をたゞ子見てや落つる雁
大都秋雁少只是夜極多
なか／＼に猿聞ききたる雁の聲
送人之朝鮮

鴈

出征 朝鮮へわ／＼と雁と行き逢ひ
妻や子や野管夢さめて雁の聲
鴈鳴くや妻鎌を取つて戸を出づ
六尺の竹の梢や 鴈の好聲
馬士きて鴈鳴いて土手の淋しきよ
いそがしや誰か追はへて鴈の聲
雨の村暮れかけ鴈の声淋し
霜月村居
鴈木に鳴けを雀すゝや臧の上
和

鳴

鳴立つとあはれものなき人日

鶺鴒

潤静かき鶺鴒の尾の動き
鶺鴒や浪うちみし岩の上

鶺鴒

鶺鴒鳴いて杉の下道晝凄
山は雲鶺鴒鳴いて奥深

鶺鴒

ちよらくと粟の穂がれ行く鶺鴒

色鳥

色鳥や一むれ嶋へ分れ行く

目白

草むらや目白だまて飛びうら
木隠れ目白の覗く雀かな

山雀

山雀の来り時は四五羽来りたり

朝鳥

朝鳥の来れをいれし日

落點

瀬の音や月夜み落つる點もあらん

海へ五里一日に鮎ヤリ落ちらん

鮎鮎

題画

さびたりを茄子の紫 鮎の腹
何とて鮎いさびたを取らしたを
堀江潟釣り得て帰る 鮎かき

河鹿

獺みみみつけられて河鹿鳴く
河鹿鳴く宿と答へて山深し

蟋蟀

草刈つて枕ふ遠しきりくす
吉原の太鼓更けたりきりくす
大寺の竈ハ冷きえそキりくす
馬の息とくくあゝりのきりくす

須磨

晝鳴いて子に取られくきりくす

虫

虫鳴くや岡にねどろく 地藏尊
虫鳴くや七堂伽藍何んな
虫の巻一巻 雞の 鳴きよきりくす

虫鳴とや梅若寺のせびき青葉の
笠の塚かや書置の虫鳴く石の下
喘みおせそあそび念佛魚の声
奈良

虫鳴とや金堂の跡門の跡
松山より帰ると秋の夜の肌寒もい
と鳥が鳴く忽ちとこくと音
て歌ひながら外を過ぎ行くこむ
れは何ぞと聞けむこゝれなん子供
等が太鼓刺しとをやーニマ

視捷會のおねをすゝるうらむを
かゝるもけをさるや
行列の太鼓退きおどり 虫の舞

蟬
蟬や承塵の邊に静すなり

響虫
響虫 夜討も来べき夜をよび

鈴虫
鈴虫よ鳴け詠の月の詠の雨鈴

須磨佐養院

鈴虫や凡呂場灯消えて松の月

蜻蛉

蜻蛉や何そわすれしゆとの杭

赤蜻蛉地蔵の顔の夕日也

蜻蛉の脚 華寺見おろす日和也

(蜻蛉の聲をわきま
夕日也)

蜻蛉の海をわきま 赤日也

動かずに早瀬の上の蜻蛉かな

滋観音

線香の烟も向ふ蜻蛉かま

須磨

秋蟬

啼きさるら蟻のひかす秋の蟬

鳴くあふのや 淋し 十六秋の蟬

秋の蟬 朝日よきはあられあり

蛸

蛸の聲の尻より 三〇の月

蛸の鳴いて杭の日影かな

蛸や夕日の窓の櫺の影

螿螂 螿螂の身は瘦せながら行根を

病後

きはごとく身ハ螿螂の 瘦腕

秋蠅 秋の蠅叩いて見れば叩かゝる、

茶店

人のさし駄ニ果るの上の秋の蠅

秋蚊 秋の蚊の泣聲耳細し 古亭都彦

秋の蚊の人見て出るよ 卯塔場

秋蝶 命なり小夜の中山 秋の蝶

何事の心いたるきを 秋乃蝶

馬糞み息つく秋の胡蝶かな

秋の蝶羽小すともるりまけり

冬蝋 ちろくと汽車を駕く 冬蝋かな

飛びはせで川よみ流ちたよ 冬蝋かな

簑虫鳴 簑虫やいとり 常夜の周を鳴く

蚯蚓鳴 童子呼ぶを答なし 只蚯蚓鳴く

秋虫雜

茶碗の圖よ

釜の湯は冷えそ 鈴虫ちんちんりり

一葉

つゝわんと坐し居れど 桐の一葉落つ
夏瘦の骨もいづとや 桐 一葉
我も泣きて 淋しき 桐の一葉のな
桐の葉の四五枚許り 勤きり

桐

木槿

夕暮の旅僧通る 木槿のな
駄菓子賣の村のや店の木槿のな
道むすの 木槿またよほこり
道むすの 木槿またよほこり
木槿咲く 堀や昔の武家屋敷

木槿垣草鞋がりの小店
浦屋先生村莊の前を過か

花木槿雲林先生 恙なきや

今出村

花木槿家あり限り 櫓の音
汐風や瘦せそ花なき木槿垣

梅屋子別

君が門木槿見て行く別れ

芙蓉 瓜紅の手をのべて芙蓉折らんとす

露をくして色の子あたる芙蓉は
芙蓉見えそさすかに人の聲ゆかし
松が根にまゐりきたてゝ芙蓉は
芙蓉咲く櫓の袂の巾着かき
ハッ時の太鼓打ち出す芙蓉は

紅葉

笠帯持つて所化二人立つ紅葉は
紅葉焼く法師は知らお酒の酌
人氣なき山の紅葉や滝の音
砂土手や山をかぶして 櫓紅葉

馬の沓かおし物櫃の紅葉散
柳樹も紅葉す。木もさびる
日表を坼山崩れたる紅葉かな
西うらまの奈良の家も紅葉かな
通天の下に火を焚く紅葉かな
夕山の裾も紅葉の小村かな

鴉溪

亭とこらく溪橋ある紅葉火

詭田川

おら雨や車といそぐ紅葉狩

白雪紅葉も火見えそ日暮れたり
銀杏葉 雑遊ぶ銀杏の下に
ササ葉かな

柳散

かせを干す餅屋の柳散りみり
明家の戸も舞ふ犬や柳散る
古渡や腐つた水も柳散る
断橋流水夕日の柳散りみり
道後遊廊の出口の柳は一遍上
人帯出生地と書けし碑の
かたりたといとくらとけたるま

たしと

古塚や恋のまゝたる柳散る

梨實 川崎や梨を喰ひ居る旅の人

柑子 佛壇の柑子を之落す 嵐水
蜜柑青き北背戸の居凡呂屋根を

木實 鋸蓋子をちぎく木の實や流し元
二つ三つ木の實の落つる音枯し

柞

代りく磔打ちたる木の實のな

柞の實や口むし赤き鳥が来る
柞落ちて犬吠ゆる奈良の横町かな
落柞やあら壁つてく奈良の町
落柞や古寺多き奈良乃町
町ありて柞の木多し一くもわ
高圓をかかして柞の在所は
柞ばかり並べし須藤の小店は
晩鐘内寺の熟柞の落つる音

村一つ流柳膳子見ゆかな
御所柳子小栗奈の用意かな
塚かよひに凡そ五町の柳留
駄菓子賣茶店の門の柳青し

道後

温泉の町をとり巻く柳の小山
柳の木や官司が宿の門 撮

法隆寺の茶店を憇して

柳と一む鐘が鳴るなり法隆寺
垣ごみ流柳毎と隣かな

栗 焼栗のちねて巻く一人かな

團栗 團栗の流ちと沈むや山の池

榎實 一本に子供あつよる榎の実かな

葛 葛の葉や何子驚く夕まぐれ
葛の葉の吹きさしつらうて葛の花

苳 苳の葉や何子驚く夕まぐれ
苳の葉の吹きさしつらうて苳の花

きぬぐーやサ舞いまだ寝ぐさ
まのふ活けて今日サ舞の花しなし
逆上の人サ舞に遊ぶべー
二十日朝顔の花細り
とりのつきを朝顔上の柳か
サ舞や乗りたくれたの二番舟
サ舞やまのふ死んだよ小傾城
サ舞の花とふ鹿やいつく鳴
サ舞の答うれーや酒の醗
サ舞の餅あたらかき差なかな
小傾城サ舞の君と申ー

萩

サ舞や裏這いおはる八軒家
サ舞やとてし短き活世なら
サ舞又一夜とあたる車かな
サ舞の小鳥よとりの山家か
サ舞や十日庚らぬ小商人
酒磨子ある頃虚よをづれ
君がサ舞の朝顔は今よりとらお
帰るか朝顔咲きー苗守の垣
石女のサ舞の花よふかひかな
風をいそみサ舞の上枝の花もなし

桂鹿かりきよきよきよの花五町
さきら敷りつ皆露の秋秋の露
馬引くや松の下道 乱れ 秋
傳もろー山門閉ぢを 秋乃花
ほろくくと石もろるれぬ 秋の露
笥のらこぬ水と水を 秋の露
旅人の衣表着て行くや 秋の原
明き寺や取り乱し たよ 秋の花
白き水よりまねし枝の尖
と秋らりの西行も 来よ宿かさん

高臺寺

太閤の像の古びや 秋の花
頃六も病を巻きこら

雲月
村居 秋 秋 秋
ものうさわ手すりに倚れば 秋の花

山陰や 薄 薄 薄 月 八月

露を伏す 薄の原の朝日
見渡せむ 薄からなる 山邊
片側は 薄少しある 小池
賣馬の進まぬ 凡の花 芒

穂芒や跡まはら暮れと先車の音
振かゆる追ひゆく 凡の芒か
伏勢力の矢尻をうへる芒か
猪の山尻子向ふ 芒かな
箱根路の石落ちりる芒か
田の中や何ぞ残りて 花芒
薄厚月小顔の上よあり
花薄一きりに雲の起りりり
深きらなみあり先女の暮れと
岩谷をめぐりしよ数年の星霜は
知らぬ石塔のみみちりて

小舟のつれづれと字くつりぬ

女郎花

花芒暮れつれづれとも見空めず
椽朽ちて狐の穴の尾花か
淋しさに堪へて廣野の女郎花
裾山や小松が中の女郎花
堀わりわ此頃をえー 女郎花
一もは誰か塚ありて女郎花

男郎花

ハテと一いふ女能役者を見て
男郎花は男かよはけし女かな

葦花

男郎花世を待てる風情は
芦の穂や酒屋へ上る道一つ
芦の穂よ汐さき上る小川かな
芦の花は根の城の陰にけり
堀割や芦の穂がくれ揺小舟
橋やあらん漁夫歸り行く芦の花
つりーよ茶店の前の草の花
縁日や鉢子裁るたる草の花
崩れけり土橋のおちを草の花
城門やいくさしなきて草の花

草花

雨路もつや朝日斜める草の花
堂崩れて地藏残りぬ草の花
何草を屋根よ花咲く奈良の宿
草の花練兵場は荒れより
草の花少しありけり道後より
城跡や風をさぐると草の花
静かなを少し吹かると芭蕉は
かさくと猫の上り芭蕉は
破れ盡す貧乏寺の芭蕉は
大寺の施飯鬼過おたる芭蕉は

芭蕉

六尺の庭にふさかの芭蕉かな
さらしくと白雲の芭蕉かな
石の觸れて芭蕉驚く夜半に
大寺の芭蕉廣がる庭の隅
新

芭蕉破れて縁ふべもあらぬ
芭蕉破れて古池半ば埋もれり

北隣の夢大前御つらそす

壁隣 芭蕉に凡のわらり
芭蕉四五株朱欄の橋のせむれたり

黄檗の山門 深き芭蕉かな
猿松の裡と繋ぐ芭蕉かな
秋海棠 石の跡に倚り秋海棠の姿かな
女にびて秋海棠に何思ふ

桔梗 銅瓶の白き桔梗と
漱石宮居の一間を借りて

桔梗 法けと志づらく
假の書齋外

紫苑 竹の蔭に紫苑話けたり
軸は誰

蘭

う靱 紫苑生けたり / 床柱
八重サ律 甚れゆし / 宿の紫苑は
蘭の香に来し人 / と侍つ夕
蘭の香に琴ひく / 人の聲やい
蘭の香や女 / 詩うたふ 踏 東坡
雨蕭々 蘭の花 / 老いて黒
百両を蛇も / すすまぬ 蘭の花

野菊

草の中を野菊 / 咲くあり 一里塚
肥溜のいづつ / も並ぶ 野菊あり

葛

道の邊や 荆がく / けり 野菊咲く
草むらり / 其中に 野菊あり 咲く
野菊やらん / 汽車の 窓より 見ゆ
きり 塵や日陰 / の野菊 濡れて 咲く
鉄砲のかす / きたり びく 野菊あり
葛からむ 侍町 / の土塚 あり
葛さか / 窓より 緑の 朝日 あり
西側は 葛の 窓なり 四思堂
半松の 葛も きたり 紅葉
藪から 寺の 土塚や 葛紅葉

雞頭

菅草の法華の寺の雞頭花
雞頭の丈を揃へたる土塀
雞頭の本残る島かな

穂荻

水せきく穂荻踏み込む野川
畦道の尽きく溝あり
溝川を埋めて荻のさかり
荻の穂や裸子桶を上げて行く
穂荻の花

露草

牛部庵の露草咲きぬ牛の留守
露草や野川の鮎のさく濁り
虫鳴くや花露草の書のお路

曼珠沙花

道なきや魂消たかに曼珠沙花
道なきやきよありとしたり曼珠沙花
一本五本をくえものうし曼珠沙花
草むらや土手あり限り曼珠沙花
いよつと葉は牛がく子たか曼珠沙花

昔思ひ

余戸村を過ぐるた二十玉の昔思ひ
いよさらば

昔思ひや昔通ひし叔父が家

浦島草

病中

枕もと浦島草を活けてさう

水引草 彼岸 過ぎ水引草の花さきま

かいなりや水引草の花さかり

菊

病居士の端居をわたり菊の花
昔や昔月の細殿昔思ひて菊の花
滄浪の水濁りし菊乃花
瘦村の質を富みたり菊の花
白も黄も咲きまらべり菊の園
朝露移や奈良殿下る小菊賣
大君のあれし日や菊の花
谷川よ臨んで菊の宿を包み
菊作り顔に疱瘡のある男あり
黄菊白菊一とは赤もあらず

白菊の一カとゆうし八重サ律
菊の花天長節は過ぎたより
菊荒れて日好し蛇去り蛇来り

酒積

花の月も雪にわけてい菊の香に
愛媛教育雑誌百種の祝ひも句
松の菊古きはもつをうりも
百歳も満ちる菊のさきにつけり

小中村博士を悼む

古き香の白菊咲いて手向かな

別れを惜みて

年々や菊の思ひん思ひれん

大阪にて

菊はけて何物らへはる宿を

奈良

人形をまがむ小店や菊の花

歸郷

面白く黄菊白菊咲きわたる
同じ夜

白菊のまのしつゝもいふ月夜

暮ら来り

菊の香は只三人よ夜の更くる

不折来り

繪かきよを見せしよ庵の作り菊

小児唱
秋の夜

君か代ハ菊の花こそ大まらん

萩

濱萩み隠れて低一岳が家

白粉花 賤が家子花白粉の赤かりき

鳥山 只一つ高きところよ鳥山

鬼灯

鬼灯をほくと吹きたるる鬘

鬼灯の少し赤らむをたらかりき

鬼灯の少し破れたるを口をーき

末枯

末枯み人を恐れぬ 狐かよ

末枯の若草山となりみりり

鴉鳴く心根の小草よー末枯

秋茄子 武家町の島みりぬ 秋茄子

秋茄子小きはよつたらうい

田舎

熱いあれど寝いあれど秋茄子

夏

切賣の西瓜ふなり市の月

病中

敷けたか西瓜ハ赤し肺わろし

西瓜舟天の河原まつきふり

稲葉

晚鐘や稲の葉末を鳴り返

高縄や稲の葉末の五里と里

稲の花

何とばかりてまゝありぬ稲の花

犬山の城もかたり稲の花

南無大師石手の寺よ稲の花

東ははや出入ふさげの稲乃花

稲の花四五人後りつありく

真宗の伽藍いかあー稲の花

汽車道をありけむ近し稲の花

山城の残り夕りや稲乃花

うぶすなに儼立てる稲の花

迷望

稲の花今出の海の光りけり

石手寺

二の門は二町奥より稲の花

豊三年

百姓の家の底より稲の花

病起郵ねみ出り

杖よりて町を出つれを稲の花

あゝまきま

本堂やいしら（おけし）を稲の花

村中の先生顔や稲の花

稲穂

豊三年や稲の穂がくれ雀鳴く

稲の穂やうらはものういかり

山尺くまを稲の穂末の白帆か

稲の穂の山嵐みなりし夕か

雨晴れて稲の穂末の夕日か

稲の穂み雄路の城は暮れて

稲の穂に十里の雨の静か

朝露み稲の穂波の乱れ

笠言を眺望

稲の穂み湯の町底一 二百軒

稲造

えせ違ふ流車一の行方や稲造
松山の城を載せたり稲造
稲造朝日あつらふより
四圍路や小山の底の稲造
奈良

一條も九條も見んず稲造

早稲

一枚の田は早稲の穂みかたけり

稲

魚提げて帰る親父や稲の中
稲の香に人居らばぬ避病院
稲の香の雨ならんとして燕も
ところく家かたまりぬ稲の中
庄屋敷の棺行くや稲の中
家高低稲段々に山の傍
むら雨やと山も稲在
法隆寺

稲の雨班鳩寺においでけり
歸京

稲の秋命拾ふて戻りりり

川稲

順禮や稲川をわぶと見て過る
子を負ふて女瘦田の稲を刈る
早稲晚稲川の東海道長し
道をゆくや稲川の男こく女
稲川の錦持つて女見返りぬ

落穂

乞食の袋に見ゆる落穂か
君が代は道子拾ひぬ落穂か

干稲

干稲の上に首出す地藏か
山陰の干稲す晝の日脚は
帰京途中
苗代を出て干稲に戻りりり

稲掛

稲掛けの家まばらん谷の底

粃干

粃干すや難遊ぶ門の内

今年米雀祝し嵐よろこぶや今年米

黍 城あとの石垣高し 黍畑

守呂を瓢亭に送りけし

黍小黍一里半米を別れけ

唐黍 唐黍のうしろに寺の壁

唐黍の白髪もなすらむありし

粟 粟や菜や裾山島四角なり

山里や箕子干す粟の二三升

法龍寺にむら家君の墓を尋

ねむ今は畑中の荒地と知りて

またたきしは海の催はれて

粟の穂のうを叩くをこの墓を

石手寺

通夜堂の前に粟干す日向小

粟の穂は雞飼ふや一構へ

葡萄 葉に虫よとけんながら葡萄が

虫飛ぬや葡萄島の薄月夜

芋

里人よこふしハ許せ芋畑らん
芋ハあれど酒まー月を如何せん
いも積んで中嶋舟の来りりり
知し人のいも送り来し俵かち

蕃薯

蕎麦花

山本や日落ちて見ゆははの花
砂土手や西日をうけて蕎麦の花
蕎麦の花野川のまはる水まき
山本やうーり上りよ蕎麦の花

糸瓜

山本や雲をうらぶ蕎麦の花
山明けぬられも花蕎麦元ハ雲
雪隠の窓みぢらりと糸瓜かな
五六反叔父がとりし糸瓜かな

瓢

苜蓿長く下ハ瓢の風ルな
蕎麦屋根の右ハ傾くおくべハ

蕃椒

唐辛子甘芦のまら屋の戸ハ外
し〜と赤き色ちり甘番 株

自著の後み題す

はらわらもきこて淋しや著 椒

ぬかこ ほろくくとぬごころんや 垣根は

牛蒡方 牛蒡方肥えて鎮守の祭近よりぬ

間引菜 間引して緑少き畠かな

茸 茸 取つて大聲あぶる女かな

名も知らぬ菌や山のたむけり口

題画

松茸にとし茶茸ハ可愛らし

松茸 松茸のみやどりて青ま松葉は

秋植物雜 古の衰や芒の小雨の露

恋塚や男芒子 女郎花

柳子照り蕎麦の雨ふる畠は

蕎麦の雪棉の霞はわらわら

谷あいやろの掛稲山ほ柳
川舟や木樅の垣根菊の北月戸
小橋かけて黄菊誰駒など見えぬ

顯画

秋茄子唐辛子の朱に奪守のれぬ

秋二月奴学病とやいふし今
またのそんで

せわーるや桔梗子来り菊まき

奈良

柳赤く福田みのけり 坂井の内

冬

小春

電信子雀の並ぶ 小春のたま
山門子鹿干す奈良の小春かな
廻廊に鏡の落ちたる小春かな
山底子世と断つ村も小春かな
瘦村に七鳥舞い落つ小春かな
黒船子傳馬のたか小春かな
唐橋子むと大眠小春かな
雲近く行くや小春の真帆片帆

瘦村に見ゆや 小春の 風
病む人の病む人をとふ小春は
うささーや小春の蠅の顔につく

病後三句

蜻蛉よ馴ゆる 小春の端居ハ
あけ放す窓は 上野の小春ハ
春の暮より入院ー居る屋空の
もろみ遣はす

いたんーや花のなわみの小春は
近衛師團凱旋

いんーくむ崩け小春の 櫻花

病中

寐るやうつゝ小春の蝶の影許り

小六月 日影さす人形店や小六月

牛の子や賣らばを遊ぶ小六月

新嘗祭

新米に菊の香しあはれ 小六月

神無月 馬鹿よなる祢宜尊ーや神無月

十月

十月の海、風いたり蜜柑船
十月の海、帆がちに舟勝ち
十月の雀飛びこむはうり
十月の雀も鳥も出てみ
十月の日和み掛けし晩稻
十月や鳩来ひりふ藏の前

初冬

初冬の萩も芒もたをねぐり
初冬の鴉飛ぶちみり二見 鷗

霜月

冬立つや立たずや留守の一家
菊の香や月夜ながりに冬入

霜月の野の宮残り嵯峨野
霜月や奈良の都のト屋 竹鼻
霜月や淀の夜舟の三四人
霜月や雲もかくらぬ晝の富士

師走

草の根を氣のかちる師走かな
うーらから追ひくるやうな師走か

艦隊の港より師走の
夕霧より伊左さまの師走は
馬糞も見えぬ師走の日本橋
风光の師走の空の月夜かな
気楽さのまたも師走の草枕
馬の息見えて師走の夜明け

年末

行く年の雪五六尺つかり
行く年の茶番に似たる人のさま
行く年の四つ橋に灯の往来

年暮の舟太太平洋の船の中
山嵐の暮も何ともなりし山の雲
隠れ家の年行かんともせざり
思ふこと今年も暮れて一か
山門や浮世なかに暮の暮
たまたま遊女いらむ年の暮
蜘蛛の巣のかくて今年も暮れ又多
画の駒の馳せて年行く白髪
大三十日 摺小木や大つごもりを播き廻す
梅はけし 青磁の瓶や大三十日

淑石塵子来り

流りりり大つこりりの来ぬところ
淑石が来て塵子が来て大三十日
淑石来りいき約あり

梅活けて君待つ菴の大三十日

春近

あかりや一寸われは春近
春待つや只四五寸の梅の苗

寒さ大名の通つてあとの寒さ

くらがりの人み逢ふたの寒さ
菫花微の花の此頃絶えし寒さ
水音の枕子落つる寒さ
木のあひみ目星のきらつく寒さ
野を行けむし食の鉦の寒さ
山風みほくと立つたの寒さ
をうきりと富士の見えたの寒さ
旅籠屋の我みつれなき寒さ
なまじい子人の逢ふ夜の寒さ
堀越の狐火見ゆる寒さ

雨晴水て風々風いで寒さ
母病んで粥をたと子の寒さ
庭の月晝のやうなる寒さ
見上げた高石かけの寒さ
薄暗き穴八幡の寒さ
又削の四継漢の軸の寒さ
舟はたよ海のをきたよ寒さ
谷のぞく十綱の橋の寒さ
井藤原の出口よ寒し牢屋敷
雲たよして空の寒さよ小山

囚人の頭筋寒——馬の上
佛焚いて佛壇寒——味噌の皿
寒さうに金魚の浮きし日向小
この寒さ敵後の人のちつかい
寒き目を書もてはいし一刺かな
寒き夜や妹がり行けん温鈍賣
寒しれど不二見て居るや阪の上

神田橋

石垣や松這い出で、水寒——

鬼の画

掛けらぬを汝よ此世の凡寒し

壯士

肩を張り拳を握り寒さ外

素香氏の北海道へ行くを送る

この寒さ北に向いたる別れ外

漱石東条一乗りしよ

足柄の寒さを寒かつたむこんしよ

われ小軍隊歓迎天を招かんと

めどたさよ袴つげたる寒さ外

この寒さ君何地へか去らんしよ

狼烟見よ人の寒さや城の上

昔記山川是今傷人代非

このたいて一人で通る寒さ外

冬花 冬花れや水なき河の橋長し

冬さよ小店や蜜柑 薩摩芋

冬花れや焼場とめぐる 枳殻垣

冬日 冬の日の雀下りけり 飯時分

冬夜

冬の夜の稲妻薄——星の中

一月十六日夜

冬の夜の更けとなるをうらむ

霜夜

金岡の馬静まりし 霜夜小

冬時候

大木のすつくと高——冬の門

音もな——冬の小村の八九軒

冬や今年秋病めり古書二百巻

冬や今年今年や冬ととうりふく

十夜

旅僧のとまり合は 十夜式

月影や外ハ十夜の人通り

御命講

日の人や法師居並ぶ御命講

佐渡へ行く舟呼びしとを御命講

神の留守

柏大の片足折れぬ神の留守

臘八

臘八や眠たがる目も雲白——

寒念佛 寒念佛 に行きあひしりくく寒念佛
通るなり 又寒念佛 五六人

鉢叩 鉢叩き 敲きしつたる音なり

神送 神送り 出雲一向ふ雪の脚

門松賣 眼鏡橋 門松舟の着きにけり

年市 年の市 橋へ出ぬけそ月夜かな

年の市 十町 詩りつまきけり

雨雲の人 みのりふ 年の市

馬の尻子 行きあひしりくく 年の市

いそがし 和人 押しかけの 年の市

年々 西山へ年々 入り行く一人りな

煤拂 煤拂の 門をたとなす 如うな

煤拂 神の佛も 草の上

煤をくとおほしき 船の埃かな

煤をいって無村の幅のりくり
煤をすのこつた身許せ四思半
煤をらひ又古下駄の流氷来
大佛の雲もついでに煤けらひ
佛壇に凡呂敷かけを煤をらひ
奈良

千年の煤もろくろをす 佛たち

掛乞

掛乞の留守を叩くや竹の門
大坂や掛乞ならけ 栲ならけ

餅搗

餅搗の烟みきをふ城下か子

年忘

年忘れ折ら猫の啼いて来

麥サ時

死にかけしころありしか年忘は
成庭の年忘れ草枯らるる
麥サ時や色の黒きは娘なり
麥サ時や北砥部山の麓よび

爐開

爐開や叔又の法師の参らぬ

巨燵

巨燵から見ゆる下橋の人通り
人々あり巨燵の上の草 双紙
縫物の背中よりたゞ巨燵は
丁稚叱る身は無精者の巨燵は
押しかけて暮るたゞし巨燵は
かりそのの苦説まねる巨燵は
みちのく此旅籠をたいて巨燵は
晝中の傾城寐たゞりり
老いもの戀もいと一置大燵

漱石未の

火桶

何いふこところら一つを参らる
風呂敷を掛けたる晝の巨燵かな
文机の向きや大桶の置き處
化物ふ似てらうりやど古火桶
火桶張る昔世の白髪かな

湯婆

傾城のいとり寝ねたる湯婆は
舟子病の遊女の星の湯婆は

炭竈

松伐つて月炭竈より上り

炭賣

名處の炭賣黒く生れけし

炭

鋸子 炭切の妹の手を黒き

炭團

米盡きと炭團たこち小俵かち

櫛

櫛たこや櫛の炭 杉乃凡
落武者に驚かされぬ櫛の夢

冬籠

櫛の火や雪子埋ゆの木曾の家

冬籠り 連磨は我をほらむ
冬籠り 金平一本の二三冊
冬籠り 世間のまを聞いて居る
冬籠り 雪のこ子一人まけし
冬籠り 煙のもろく壁乃六
冬籠り 顔も洗はず書に對す
冬籠り 書の薄團のすぢかい
冬籠り 今年わん古里にこもりけり

五苦四を見れば味増あり冬は籠
雲のくく障子の穴や冬はこもり
山も見ず海も見ず船も冬はこもり
琴の音の聞えてゆり冬は誌
くら若き妻のこもり冬はこもり
人病んで死のこもり冬はこもり
なかくこもり病むを力の冬はこもり
唐の春奈良の秋見て冬はこもり
あぢきなき三浦の病も冬はこもり
峠の道の中よつくり冬はこもり

ニ夫婦ニかりゆり冬はこもり
商人の坐敷に僧の冬はこもり
音もせず親子二人の冬はこもり
傾城の文居るゆり冬はこもり
冬は誌書齋の掃除無用あり

達摩積

冬は誌物とはぬ日ハもあらじ
ちり山里を思ひいで
一町と山のどん底も冬はこもり

頭巾

頭巾着て人と話すと橋乃上
我親も似てるの〜昔は古頭巾
兜着たときは昔に頭巾か
薙刀に焚火の〜頭巾か
それ違ひ又〜頭巾か
赤頭巾人甘んじて老いけらし
頭巾着て女子似たる男かな

蒲團

短きに蒲團を引けむ猫の聲

紙子

鐘つきの雲み濡れた紙子
子鼠の尿イシかけた紙子

細代守

ながらへて八十路子ありぬ細代守
暁や凍えん死なで細代守

凍

手凍えて筆動かさ夜や更けぬらん

霜やけ

おちふれて人霜やけよわぶか
霜やけや娘の指のおそろき

鞍

胼多き鞍多き手足かな
あかりや傾城老い上根岸
此やあふりの手乃悲ありき

風呂吹

黒塔や赤子の腕の風呂吹を
風呂吹の口をやかぬを口を

莖菜

朝霜や猶青臭き莖菜桶

納豆

納豆や飯焚一人僧一人
起きよ今朝叩け納豆小僧ども

戸を叩く音は狸か 藁倉

鰻汁

鰻汁 心もとるま寐つきは
鰻汁 一休去つて僧もあ

鷹匠

鷹匠の鷹を射たる荒野に

冬之糶無精さや 蒲團 籠の中て豆袋をぬぐ

時雨

新発智の青き頭を 初時雨
上人を載する舟あり ちら時雨
猿僧の牛も乗つた 時雨
白菊の少しありらむ 時雨
稲掛けて神南村の時雨
雞の子の三早原ある時雨
三井寺に汎と湖水の時雨
いつの間に 時雨
大名の柩めしたる時雨
塩鯛の塩はらりと時雨

橋ノ夕日竹屋の渡しに
五に艘五平太船の
櫓田に三畝の緑を
提灯の見えつかく
汽車此夜不二と柄
島守のあらめの衣
土佐の海南も
大佛の鐘が鳴る
傾城ハ知らじ三夜

火とるの火とる
月かろえ嵐やまこと
釣舟や
旅人や橋に
行きつらぬら
月出るや
花土賣の片荷
大和路は時雨
いづれや紅子
いづれや月代

いづれや上野谷中の杉木を
いづれや隣の小松庵の菊
いづれや右の亀山星が因
吉原や書のおうなよ小夜時雨

病中

いづれや腰湯ぬもみて雁の聲
此白川宮飛御と扇を侍りて
そらら涙せまあふず金州侍在
陣のめよ事など只おぼらしの
こころよきんそ

いづれと脚をま柔らすすも
何がよつらそす

いづれつも菊健をこ我宿ハ
病の可今もつらはず

おいづれん君が病いのわいさい子

謡曲結上

盤渉みいづる須磨の夕外

雲をらの内

京さーて山の時雨の迷い雲
傾け人羊の裏行く時雨か
剣の舞(なまつと)いづれ此か

風

風や胸の破れし太鼓橋
風や雲吹き渡す海をて
風や船沈みたるあしり
風や月の光りを吹き散らす
風や海へ吹かす人の聲
風を空へ吹かせる谷乃家
風の馬吹き飛ばす廣野
風の外ハシ路葉の月夜
風に向ふて登る峠下り

風や大佛のたを詠年あり
風やまらく薄まらくと
風や十年賣れぬ古佛
風や鼠の腐る狐民
風や鹿の餌賣れぬ豆腐売
風や鐘引ますと道の端
風や滌りとて澁路つ
風や犬吠え立つ外が濱
いらくと風鳴る庵の空

妖怪体

古御所や風更けて笑ひ聲

悼

風や君が中^かほろし吹きたらす

十六羅漢圖

風に尖らぬ頭をたかりくさ
かり尻の風つよき廣野に
冬の月五重の塔の裸なり
裏山や月咲えて笹のま^まハ何
寒月や猫の眼光の庭の隅
木の影や我影動く冬の月

冬月

寒月や吹き出されて山石の間
寒月や石塔の影杉の影
寒月や雪尽きと猶風をけし
寒月や造船場の裸船
寒月や捨子乳子ほく橋の上

雪

金殿のまゝ火細し夜の雪
敷芝や松の下陰雪残る
武藏野やあちらこちら雪の山
くさくさ丸木の舟の雪もろし

峠より人の下り来り吹雪は
あり向いて塔見あけたる吹雪は
つらきといふもたゞ雪の園
竹や藪の梢も遠し雪の山
辻堂も火を焚くと傳や夜の雪
元山の雪にもたゞありあり
二三尺雪積む野邊の地蔵は
帰さず初雪やんで十日月
五六軒雪つむ家や枯木を
山甲も雪積む下の水の音

音もせぬなりぬ吹雪の馬の鈴
高繩と知らぬて雪の尾上は
古閑や雪ふりし鹿の聲
大佛の片肌雪の解けぬ
世も寒へてくや雪の道一つ
杉垣の上も雪持つ小家は
及道や吹雪に下り四手馬
吹き乱す吹雪の鷹の鈴暮れ
初雪の大雪にならぬ口を
雪ながら山紫の夕かき

夜の雪やせわしく叩く医者の門
 雪雲の空またいよす裾野に
 初雪の橋の擬寶珠に鳴く鴉
 初雪のたらりと降りし小不二水
 雪ながら氷の小道や星月夜
 雪積むや次第下りの屋根続き
 雪空の一隅赤き入日かな
 松の雪の化て落ちる水の中
 病中
 庭の雪見ゆわ 剗の行き戻り

霞

雪の旅 おろろからんやうながら
 送別

炮爆子豆のたがまや 玉 あぶん
 大佛のおとろきもせぬ 霞 水
 雑刀を車輪のまはす 霞 水
 石橋の上みたよらぬ 霞 水
 岩関の山よけに飛ぶ 霞 水
 旅僧の笠破れたる 霞 水
 猪の人をかけたる 霞 水

雲
捨舟の中にたむしの霞かき
ものすこき音や霞の雲をるれ
すさよーや霞ありこむ鳩の海
曉の霞のたよるおとー穴
大粒な霞あつたり薄氷
逢阪や霞たむしの牛の角
雲にもしりぬべらるり宵の雨
涸れ泥の泥子みせり夕かな
みせりや水道橋の薪舟

冬雨

古濠やだらりと冬の雨

霜

鶴の霜日の短きも限りかま
朝霜に日の日井りたる城下かな
朝霜や不ニを見子出る廊下口
初霜に負けて倒れし菊の花
初霜や鏡よふの鬢乃上
橋の霜雀が下りて遊びく
曉や御庭の霜の捨篝
尼寺の鏡かりくり門の霜

まわべつ菜子横濱近し如の霜

腰の疾ふかりて

起せども腰が抜けたか霜の菊

中野道遠と吊ふ

世の中を恨みつく——こ土の霜

冬日

冬の日やわつつかの雪のすまに又

冬の日や馬の背中よ落ちかき

冬の日も落ちて明——城の松

冬の日のとにかおるりし小村は

枯野

一 枯野のあとになりたる枯野かな

満月の半分出りたる枯野かな

舟曳の斜めをわらふ枯野かな

鳥飛んで荷馬騒ぐ枯野かな

辻駕に狐乗せたさ枯野かな

馬見えて雉子の逃けたる枯野かな

冬田

笠帆の白帆よ下りの枯野代
村人の都へ通ふ枯野代
この食の鑊錢拾ふ枯野代
鷲一羽をよかに立つる枯野代
のづら〜く女も逢ひ〜枯野代
氣車〜あらはに枯野を走る畑代
五六人行くや枯野の〜つ道
あせ〜許り見えて重なる冬田代
駒込の阪と下れむ冬田かな

冬川

氣車道の目標高き冬田かな
料頭よ鳥のとよの冬田かな
氣車道の一段高き冬田かな
見下せむ晩稲の残り冬田代
菜畠もまどりて廣き冬田代
冬川よ鴨の毛のさかな
冬川の河原がかりとありま
橋枕よ残り藻屑や冬の川
雲絶えて源涸れぬ冬の川

水筋ハ潤水て并や冬の剛

冬の水 雲墮ちて泥静まりぬ冬の水

氷

古濠の小鴨も居らぬ氷かな
瀬の橋裏やうゝ氷かな
水鳥の小舟子上の氷かな
元山をのびらす浦の氷かな
崖道を氷室へたこぶ氷かな
—んとして棒名の池の氷かな

溝川子竹無北かゝる氷かな
川橋に水ををなす氷かな
人住おぬ屋敷の池の氷かな
ちりくと白水も流つる氷かな
ひわもとの音や想のさす田の氷
四辻や打水氷の朝日影
~~氷のつらさ~~
鶴鴿の川株つたふ氷かな
小夜更けて氷を叩く隣かな
曉の氷すり碎く硯かな

氷柱

旭のさすや 椋の氷柱の長短

霜柱

土とみに崩る 煙の霜柱

枯れ尽す 菊の島の霜柱

鳥

湖や渺々として 鳩一つ
橋きはへ流氷を来たか 鳩
薄氷を砕いて 鳩の浮きた

鴨

鴨啼くや 上野の園に横はる
古池や凍りもつかで 鴨の足
鴨ハ見ふがかり 味噌汁酒の醗
搦手や晝妻より 乙濃の鴨
内縁のみ小鴨のたよる 日向は
蓮枯れを氷み 飯の小鴨は